

ある戦争体験―夏の真昼の機銃掃射

昭和二十年のある夏の日であった。当時、退役陸軍中尉で、熊本連隊区司令部勤務、伝書鳩班長であった父（当日非番）、母、私（旧制中一年）の三人がいた熊本市黒髪町下立田（立田山配水池石段近く）の自宅（借家）の上空に、突然爆音が響きはじめ、旧九州女学院（現ルーテル学院）の方角から、艦載機らしき一機が現れ、バリバリツと機銃掃射音が聞こえた。幸い非番で家にいた父は、早速軍刀を杖につき縁側に腰掛けたまま「裏へ退避せよ。」と言ったと思う。母と私は防空頭巾をかぶり、裏手の立田山側の縁側に伏せた。おそらく立田山上にあった模様の高射砲陣地をも狙った攻撃だったと思う。

かつては、昭和十二年の南京城中華門の戦いに参加し、戦闘中に、右大腿部盲管銃創を受けたはげしい実戦経験を持つ父は、軍刀を杖に縁側に腰掛けたまま敵機の動きについて教えて指図してくれたのであった。あのときも父がいなかったら・・・と今思えばまことに間一髪で救われたのだった。

幸いともに機銃掃射の的にはならなかったが、あとで聞いたところによると、ごく近くの立田山配水池石段近くの変電所付近で学校教師だった女性が亡くなられたとか（機銃掃射で）更にまた、当時通学していた済々黉も機銃掃射を浴びたそうで、当時、旧陸軍幼年学校受験のための特訓を受けて登校中だった同期生もやつのことで防空壕に逃げ込んだと述懐している。うわさではあったが、戦記ものの中でも「沖繩」の次のターゲットは「九州」だったともある。もしあの八月十五日の昭和天皇の玉音放送がなかったら、日本はどうなっていたらうか。更に、夏の日の空襲の時、軍人ではあったが、「厳父^{げんぷ}」ではなく「慈父^{じふ}」であり、沈着でもあった父が一緒にいてくれたことも、まさに天佑^{てんゆう}と思わざるを得ない。

今後も「宇宙戦艦ヤマト」みたいなカッコいい戦争はとてもないと思う。

「戦争はドラマにあらず油照り」自作。